

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 5 日現在

機関番号：32414

研究種目：基盤研究 C

研究期間：2009～2012

課題番号：21531036

研究課題名（和文）発達障害のある者への障害特性を考慮した体系的キャリア教育プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of a systematic program for career education for students with developmental disorder

研究代表者

宮本昌子 (MIYAMOTO SHOKO)

目白大学・保健医療学部・准教授

研究者番号：70412327

研究成果の概要（和文）：発達障害のある者の就労の困難さや離職率の高さなどの問題に注目し、彼らの就労に必要な学びを教育段階から少しずつ体系的に積み上げられる機会を提供するイベント体験型のキャリア教育プログラムを開発した。就労準備に必要な学習内容について調査した結果をプログラムに反映させ、小学生～高校生に実施した結果、コミュニケーションに関するスキルは向上するが、「自己理解（障害理解）」が向上しにくいことが明らかにされた。

研究成果の概要（英文）：We developed a program for career education for students with developmental disorder, from the perspective of difficulty of working and the high unemployment rate. This program can provide students for chance they can acquire the learning for working, that is called a model of experience event. The results of investigation on the contents of learning needed for preparation for working were reflected in this program. It is cleared that, through this program for elementary school children, junior high school children, and high school children, though skills on communication have increased, ability of self-awareness weren't intended to improve.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
2012 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育・特別支援教育

キーワード：キャリア教育、就労準備、プログラム開発、コミュニケーション、発達障害

1. 研究開始当初の背景

近年、LD、ADHD、高機能自閉症等の発達障害のある者の就労の困難さが問題視されている。実際、一般枠で就労した場合、初職での離職率は6割であり、そのうち1年以内の離職率は約4割であるとの報告(内藤・山岡, 2007)や、首都圏にある就職・自立支援施設では、ニートの若者のうち約2割に発達障

害・またはその疑いがある(読売新聞, 2006)との報告がある。

発達障害がある場合、必要な情報にうまく注意を向け、知識や情報を獲得したり、獲得した情報を自分の過去の経験と併せて体系的に整理し、記憶することが難しい等の特徴がある。このような問題に対処するためには、学びに時間のかかる発達障害のある者の特

性を考慮し、彼らに「①就労に必要な学び」を「②その障害特性を考慮した分かり易い形で」「③教育段階から少しずつ体系的に積み上げられる」機会を提供することが重要である。しかし、現実的には発達障害のある者へのキャリア教育の実践は乏しい。よって、今後は「発達障害のある者の特性を考慮し、彼らが必要な学びを分かりやすい形で体系的に学べるキャリア教育プログラム」を早急に開発・提供し、地域での発達障害のある者の就労準備に向けた取り組みを促進させていくことが必要であると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、発達障害のある者の学校教育から就労への移行を支援する、障害特性をふまえた体系的なキャリア教育プログラムを開発することを目的とした。

プログラムはイベント体験活動をベースとした内容のものを開発するが、将来について漠然と考えた上で、上級学校への進学を検討する年代となる、「小学校高学年段階」ならびに「中学校段階」の少年期のプログラムと、将来について現実的に見据え、就労も一つの選択肢として考え始める「高校段階」の青年期のプログラムの、3つの種類のプログラムを作成することとした（プログラムの課題には差異を設ける）。

3. 研究の方法

(1) プログラム開発のための調査とそれをふまえたプログラムの構想

① 文献調査の実施

一般のキャリア教育の文献、障害のある者への職業リハビリテーションの文献を収集・分析し、「発達障害のある者が就労前後に直面する問題」や発達障害のある者のキャリア教育を実施する上で必要な「学習内容や学習指導の方法論」を整理した。

② 質問紙調査・面談調査の実施

①を経て作成した調査票より、発達障害のある者が直面する就労前後の問題、彼らに必要な教育段階での取り組みについて明らかにした。

③ 全体プログラム（試案）の開発

②で明らかにした知見とキャリア教育の4つの学びとの対応関係を分析した後、既存の4つの学びの各年齢段階別の指導目標（国立教育政策研究所生徒指導研究センター、2002）に基づき、小学校高学年段階から高校段階までの体系的な実践内容を構想した。

(2) 各教育段階に応じた体系的なプログラムの開発（実践、評価、手引きかを含む）

各教育段階において、「カフェ」を題材とした。「カフェ」を題材とすることで、店の企画・実行を仲間と協力して遂行する経験から将来必要となる「仕事面」や「人間関係面」

の技能の基礎を学ぶことができると考えた。

① プログラムの実践準備

キャリア教育の根幹となる「コミュニケーション能力（相手の立場や思いをふまえた上で正確に話す・聴く能力）」を「人間関係面」の指導と併せて行うこと、また「情報活用能力や将来設計能力、意思決定能力（必要な情報をうまく得て計画し、やり遂げる能力）」などの「仕事面」の能力についてはイベントの計画・立案の流れから指導を行うこととした。

② プログラムの実践

平成22年から24年の3年間、月に1~2回、計7~10回行った（平成22年：小学校高学年、23年：中学生、24年：中学生・高校生）。

③ プログラムの評価

効果測定の尺度を開発し、事前・事後に実施した。コミュニケーション能力については、事前評価、プログラム中、本番、事後で評価を行った。

4. 研究成果

(1) 発達障害のある者の就労準備に向け、必要な学習内容について

一般のキャリア教育、ならびに障害のある方への職業リハビリテーションに関する文献から26項目の問題に選ばれた（例：働くことに対する必要性や切実さについて理解が乏しい、等）。

教育支援機関（高校、特別支援学校高等部など）、就労支援機関（発達障害者支援センター、障害者職業センターなど）で勤務している226名が、就労準備段階で準備が必要と思われる項目を(1)の26項目の中から選択した結果、上位3項目に「自分自身の障害と有効な対処方法の理解(1番目)」、「働く上で必要な人間関係面での態度やスキルの理解(2位)」、「働く上で必要な生活面での態度やスキルの理解(3位)」があげられた。因子分析の結果以下の6項目が抽出された。

因子1：職業観、勤労観の形成

因子2：障害者枠での就労に関する知識の獲得

因子3：就労時に必要なスキルからみた自分に合った働き方の理解

因子4：将来を見通した進路選択方法の手続きの理解

因子5：社会状況をふまえた将来設計方法に関する知識

因子6：自分の特性に応じた職種を理解

以上の6項目を大項目とした全26項目を、通常の就労に必要な諸能力についてまとめた18項目（参考資料：資料「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み」（国立教育政策研究所生徒指導研究センター、2002）、「社会人基礎力」（経済産業省、2006）、「職

務遂行のための基本能力」(厚生労働省ホームページ)、就労移行支援のためのチェックリスト(厚生労働省, 2006))と照らし合わせた結果、全ての項目は、6項目内のいずれかの項目と一致した。発達障害のある者の就労準備に必要な学習内容を縦軸、我が国の各省庁から提案されている一般就労に必要な能力を横軸とし、両者の対応関係を表中に丸印で示すことで、今回作成した「発達障害のある者の就労準備に必要な学習内容」は一般就労に必要な能力の視点もふまえていることが示された。

以上の知見は現在までに国内の研究では明らかにされていない。さらに対象を増やして調査を行い、信頼性の高いデータを得ることで、発達障害のある者を雇用する側への基調な資料になり得ると考える。

また、6つの大項目中、3項目を今回実施のプログラムの目標とした。項目各発達段階におけるプログラムの役割について表1にまとめた。

表1 各発達段階におけるプログラムの役割の明確化

	小学生 (高学年)	中学生	高校生
●職業観、勤労観の形成			
働くことの必要性の理解	●	●	●
仕事してお金を稼ぐくみの理解	●	●	●
職業人の生活像の理解	●	●	●
●就労前後に求められる能力からみた自分に合った働き方の理解			
通常の就職に必要な手続きの理解			●
働く上で必要な業務面での態度やスキルの理解	●	●	●
働く上で必要な生活面での態度やスキルの理解	●	●	●
自分自身の障害と有効な対処方法の理解	●	●	●
自分に合った雇用形態・勤務形態の理解		●	●
●自分の特性に応じた職種への理解			
自分自身の特性やこれまでに積み上げてきた経験の理解	●	●	●
自分に合った職種の理解			●

(2)各教育段階に応じた体系的なプログラムの開発

キャリア教育プログラムの題材を「カフェ」とし、プログラム中に1回の本番を設けた。「カフェ」を題材としたのは、イベントを成功させるという高いモチベーションのもとで知識、技能を学ばせやすいこと、接客などのイベント遂行時に必然的に生じる活動の中で、就労時に直面しやすい仕事面、対人面のスキルの問題について柔軟に練習する機会を提供しやすい、などの理由がある。

①小学生(高学年)段階のプログラム開発
発達障害の診断を持つ6名の児童(小学校5年生1名、6年生5名)に、10日間(月に1~2回、1回3時間程度)のプログラムを実施した(内容は表2を参照)。

表2 小学生段階のプログラム

第1回(7月)	オリエンテーション、対象児アセスメント
第2・3回(8月)	カフェプログラムの仕事内容の理解(働く際のルール、感じの良い話し方、丁寧ですばやい作)
第4・5回(9月)	カフェプログラムの仕事内容の理解(第2・3回の内容に加え、準備物の作成等)
第6回(10月)	カフェプログラムの仕事のリハーサル
第7回	本番(施設祭でのカフェオープン)10月
第8回(11月)	本番の振り返り学習
第9回(12月)	カフェプログラムで学んだ内容の確認
第10回(1月)	カフェ見学

②中学生段階のプログラム開発

発達障害の診断を持つ7名の児童(中学1年生1名、2年生5名、3年生1名)に、計8日間(月1~2回、3時間程度)実施した(内容は次頁の表3を参照)。

表3 中学生段階のプログラム

第1回(7月)	オリエンテーション、対象児アセスメント
第2・3回(8月)	カフェプログラムの仕事内容の理解
第4回(9月)	売上の予想など、接客の練習、コーヒー作りの練習
第5回(10月)	接客の練習、コーヒー作りの練習
第6回(10月)	予行練習
第7回	本番(大学学園祭でのカフェオープン)11月
第8回(12月)	本番の振り返り学習

③中学・高校生段階のプログラム開発

発達障害の診断を持つ7名の児童(中学2年生1名、3年生名4名、高校1年生1名、2年生1名)に、計7回実施した。高校性段階のプログラムは表4のとおりである。第2~5回について、中学生には表3の内容を実施した。

表4 高校生段階のプログラム

第1回(8月)	オリエンテーション、対象児アセスメント
第2・3回(9月)	カフェプログラムの仕事内容の理解(小学生・中学生の課題に加え、店のテーマや雰囲気を設定)
第4・5回(10月)	仕入数の決定、集客数、売上の予想など、接客の練習、コーヒー作りの練習
第6回	本番(大学学園祭でのカフェオープン)11月
第7回(12月)	本番の振り返り学習

(3)プログラムの評価

①小学生段階

プログラムを通じた質問紙の結果について、対象児6名のうち1名は中学校への移行に関するトラブルの影響で自己評価が下がるという状況、別の1名は事前調査時から全項目に最高点をつけるという傾向があったため、この2名を除外し、4名での結果を示す。

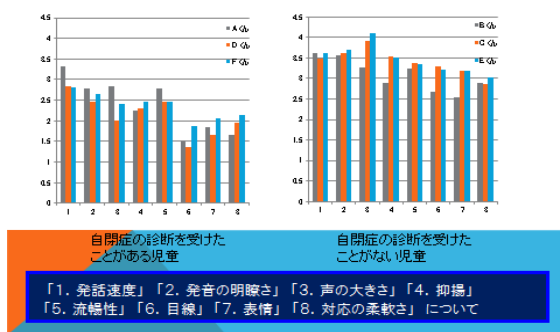
直接的に指導した内容に関し、4名共通に得意度が高まりやすい傾向のあった内容は「清潔さ」に関するものであった。

次に、間接的に指導した内容（プログラムで直接に指導はしていないが、本番での体験を通し、間接的に学んだ可能性のあるもの）について共通して得意度が高まりやすい内容は、「自己統制」「自己主張」「他者受容」に関するものであった。

本プログラム前の対象児の自己理解（障害理解）とプログラムを受けての自己理解（障害理解）の変化について、対象児らの保護者に尋ねた結果、親の目から見てプログラムの内容に関連した自己理解の促進はやや促されたことが分かった。しかし、それと障害理解とを結び付けて考える段階にはまだ至っていなかった。これより、本プログラムに、障害理解を促す支援を付加することの必要性が示唆された。

接客場面について、M大学保健医療学部学生50名が「1発話速度」「2発音の明瞭さ」「3声の大きさ」「4抑揚」「5流暢性」「6目線」「7表情」「8対応の柔軟さ」について5段階の評価を行ったところ、「発話速度」や「発音の明瞭さ」「声の大きさ」と比較し「目線」「表情」「対応の柔軟さ」の得点が低い傾向がみられた。自閉症（広汎性発達障害、アスペルガー障害など）の診断を受けた3名とそうでない3名を比較した結果、自閉症の診断のない3名の方が全体的に得点が高く、「目線」「表情」「対応の柔軟さ」の得点は低かった（図1）。これらのことから、自閉症の対象が含まれる場合の指導方法の工夫、あるいは、評価結果の限界を踏まえる必要があると思われた。

図1 自閉症のお子さん・そうでないお子さんの結果の比較



②中学生段階

本番の「カフェ」も含め、プログラムに参加したことによる能力の向上を測定するために対象児7名の保護者にアンケート調査（各項目1~4点の4段階での評定）を実施した結果、「職業観・勤労観」の2項目は全員が4点を付けていた（表5）。一方、「自己理解」の4項目についてはいずれの項目も約半数の親が3・4点を付けた。本プログラム

では「職業観・勤労観」の学習効果は上昇するが、小学生段階と同様に「自己理解（障害理解）」に関する学びは促進されにくい傾向がみられた。

表5 保護者のアンケート結果

7名全員が3・4点にした項目	
職業観・勤労観	仕事をすれば、お金をかせぐことが出来るということを理解できた。 与えられた仕事をこなすことで喜びや充実感が得られることを理解できた。
働く上で必要な対人関係面での態度やスキルの検討	マナーの重要性を学んだ。 友達への関心が高まった。
6名が3・4点にした項目	
働く上で必要な業務面での態度やスキルの形成	疲れても弱音を吐いてはいけないということに気づくことができた。 疲れても怠けてはいけないことを学ぶことができた。 お客さんの前では私語やよそ見をしてはいけない等、学ぶことができた。

③高校生段階

高校生段階のプログラムは対象児2名に対し実施した（中学生5名と一緒に実施）。

2名のうち1名はアスペルガー障害（高1男子）、1名は広汎性発達障害（高2女子）と診断されていた。図2・3は、本プログラムに参加していない言語聴覚士3名がカフェの本番場面のVTRを視聴し、発話速度、構音の明瞭性、声の大きさ、抑揚、流暢性、目線、表情、柔軟性について0~5点で評価した結果である。項目によっては評価者の得点間に乖離があるが、「目線」は両対象児で得点が低くなっており、自己評価は高めであるのが特徴的である。

今回の結果においては、本番場面のビデオ評価には評価者間で得点のばらつきが大きかったため、評価者間の一致率を高める手続きが必要であると考えた。

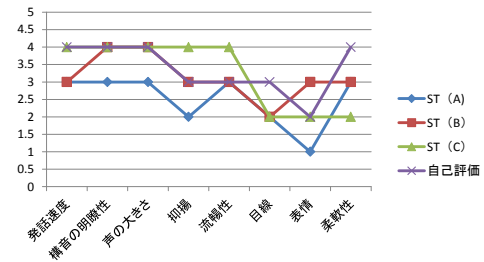


図2 対象児A（高1男子）の接客評価

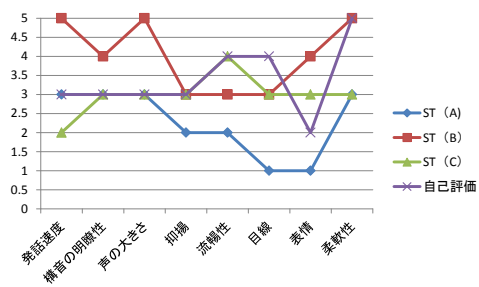


図3 対象児B(高2女子)の接客評価

また、プログラムに参加したことによる能力の向上を測定するために実施した保護者を対象としたアンケートから、2名に共通にみられた、習得の困難であったスキルは「自分の役割以外に積極的に動くこと」「人を傷つけない言い方」「困難にあった時に自分で工夫する」「困難にあった時に人に助けを求める」「不快なことがあっても感情的にならない態度」であった。

高校生のプログラムでは、店の雰囲気やテーマを考え、見込まれる集客数に合わせた仕入れや売り上げの予測まで行った。個々の活動に必要な事柄を決定し、カフェの開店に貢献することは出来たが、本番での動き方、判断力や困難時の対応等に課題が残されている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

①Hikita, T, Kodama, H, Nakamoto, N, Kaga, F, Amakata, K, Ogita, K, Kaneko, S, Fuji, Y, Yanagawa, Y, Effective Prophylactic Therapy for Cyclic Vomiting Syndrome in Children Using Valproate. Brain & Development, 査読有, 31(6), 2009, 411-413

②藤井靖史、天方かおり、荻田佳織、疋田敏之、金子衣野、仲本なつ恵、柳川幸重、発達フォローアップ外来における乳児期の共同注意に関する検討、脳と発達、査読有、42、2010、37-41

③宮本昌子、日本語版クラッターリングチェックリストの適用可能性の検討。音声言語医学、査読有、Vol. 52、No. 4、2011、322-328

④ Miyamoto, S, An Examination of Effectiveness of Treatment for Children Displaying Cluttering-Stuttering. Bulgarian Journal of Communication Disorders, 査読有、Vol. 5, No. 5, 2011, 37-45

⑤仲本なつ恵、発達障害をめぐる教育と医療の連携、人と教育、目白大学教育研究所所報、査読なし、No5、2012、18-20

⑥宮本昌子、都筑澄夫、発話への注目・工夫について、目白大学健康科学研究、査読有、Vol. 5、2012、1-10

[学会発表] (計6件)

①滝口圭子、寺田容子、宮本昌子、五里江陽子、松為信雄、発達障害のある児童生徒に対する親の会との協働による短期型キャリアトレーニングプログラムの実践Ⅰ：「よつばカフェ」参加者の「就労準備に向け必要なスキル」に関する自己評価の変化、日本LD学会第19回大会、愛知県立大学、2010

②宮本昌子、寺田容子、滝口圭子、五里江陽子、松為信雄、発達障害のある児童生徒に対する親の会との協働による短期型キャリアトレーニングプログラムの実践Ⅱ：「よつばカフェ」を通じた新たなコミュニケーションに関する指導方法・内容の模索、日本LD学会第19回大会、愛知県立大学、2010

③寺田容子、宮本昌子、松為信雄、安井宏、竹澤友広、発達障害の児童・生徒に対する親の会における就労準備に向けた取り組みⅡ：キャリア教育をより効果的に取り組むための心理・医療分野(OT・ST)からの提言)、日本LD学会第19回大会、愛知県立大学、2010

④宮本昌子、発達障害の児童を対象としたコミュニケーション指導-就労を見据えた「カフェプログラム」の取り組み-。日本発達障害学会 第46回研究大会、鳥取大学、2011

⑤宮本昌子、安井宏、仲本なつ恵、発達障害のある小・中学生を対象としたイベント体験型キャリア教育プログラムの実践、日本発達障害学会第47回研究大会、横浜国立大学、2012

⑥宮本昌子、安井宏、仲本なつ恵、発達障害のある中学生を対象としたキャリア教育プログラム-医療職(小児科医、言語聴覚士、作業療法士)によるアセスメントの考案-。日本特殊教育学会第50回大会、つくばカピオ、2012

[図書] (計2件)

①宮本昌子、他、中央法規、言語障害教育、リハビリテーション事典言語障害教育、伊藤利之(編)、2009、224-225

② Miyamoto, S, Assessment and Intervention of Japanese children Exhibiting Possible Cluttering. In Ward, D & Scaler Scott, K(Eds.), Cluttering-A Handbook of Research, Intervention and Education, Psychology Press, 2011, 198-210

[産業財産権]

○出願状況 (0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0)

名称：
発明者：

権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮本昌子 (MIYAMOTO SHOKO)
目白大学・保健医療学部・准教授
研究者番号：70412327

(2) 研究分担者

仲本なつ恵 (NAKAMOTO NATSUE)
目白大学・保健医療学部・教授
研究者番号：20256043

安井宏 (YASUI HIROSHI)
目白大学・保健医療学部・講師
研究者番号：70572379

(3) 連携研究者

なし